

会員の声

「猪狩武尚先生を偲んで」



本学会終身員、中央大学名誉教授であられた猪狩武尚先生には、平成21年11月17日に78歳でご逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表する次第です。

先生は昭和28年3月に東京大学工学部電気工学科をご卒業、続いて昭和30年3月に東京大学大学院数物系研究科電気工学専門課程修士課程を修了され、直ちに中央大学工学部助手に任用されました。その後、昭和32年同大学講師、昭和35年同助教授、昭和52年同教授となられ、更には平成元年より5年間同大学理工学部長、平成2年より6年間同大学理事を務められ、平成14年に定年退官とともに同大学名誉教授となりました。この間、教育と研究はもとより電気学会等における幾多の活動において多大なるご貢献をされました。その主なものをあげれば、電気学会誘導機標準特別委員会委員長、電気学会電力応用技術委員会委員長、電気学会回転機技術委員会委員長、電気学会評議員、電気学会同期機標準特別委員会委員、IEC SC2G(回転機試験法)国内委員会委員長、日本規格協会電気・電子国際整合化調整分科会主査、回転電気機械一般標準特別委員会幹事、産業応用部門研究調査運営委員会1号委員、回転機標準化委員会委員長、電気専門用語標準化委員会委員等があり、非常に多数の委員会において要職を務められました。特に、回転電気機械の標準、試験法、規格の制定や国際規格との整合調整等のような電気機器分野における根本的な事項に関して、先導的な役割を果たされました。これらのご功績が認められ、平成15年には「電気学会産業応用部門一学術賞」を受賞されました。

研究の分野においても先生は幾多の貴重な成果を発表されました。先生のご専門は電気機器の基礎および応用技術の理論体系化ですが、特に電気機械の理論解析の基礎となる等価回路構成理論の開発に多大なるご尽力をされ、電気機器の基礎理論の発展に先駆的役割を果たされました。先生が発表された著書の中でも、昭和52年に出版された「電気機械理論」は、従来海外における教科書等によく見られた行列を用いた電気機械の解析手法とは異なり、磁気回路に基づく物理的な考察を主体とした電気機械の本質的な等価回路の構成法並びに解析法を与え、更に実用上重要な場合の解析例、特に同期機の突発短絡その他種々の特殊運転状態の解析結果を示した点で大変貴重なものであります。誘導機と同期機の解析

電気学会産業応用部門回転機技術委員会委員長
田村淳二 (北見工業大学)

モデルと過渡現象の解析に関しては、本書を読めば十分であると言っても過言では無いほどに、今読んでも全く色あせることのない名著となっています。また、電気学会論文誌にも幾多の論文を發表され、中でも「三相二相変換における数値係数と変換の物理的意味に関する考察」(電気学会論文誌D, Vol. 107, No. 12, 1987), 「二軸理論における同期機の界磁側諸量の変換と単位法におけるそれらの基準値」(電気学会論文誌D, Vol. 110, No. 1, 1990)等は、回転電気機械の解析理論の構築に心血を注がれた猪狩先生ならではの貴重な内容となっています。

猪狩先生は、著書や学術論文の発表に加え、学会における口頭発表も精力的に行われました。特に、回転機技術委員会委員長を務められていた頃は、回転機分野の責任者として自ら発表されると同時に他の発表者に対して多くのご質問やご助言を積極的に与えられ、後輩研究者の育成に努められました。技術委員長をご退任後も、大学での激務の合間を縫っては学会に参加され、定年を迎えられる直前まで自ら口頭発表されていたお姿は、我々後輩に取りましては大きな刺激になったと同時に、研究に対する真摯な取り組みに感銘を受けたものでありました。一方、猪狩先生はこのように研究や学会活動において著名な先生であったにも拘わらず、非常に温厚な性格で、我々後輩研究者に対して常に暖かいお言葉を掛けて下さり、また学会懇親会などにも積極的に参加されて、2次会などではカラオケを披露される等、非常に親しみ深い先生でもありました。

回転機技術委員会が設置されたのは昭和54年であり、猪狩先生が委員長を務められた昭和59～63年は正にその草創期であり、本委員会が今日こうして活発な活動を続けていられるのも猪狩先生のご尽力に負うところが非常に大きいと言わざるを得ません。その意味においても、回転機技術分野における大先輩として我々に多大なるご指導を頂いた猪狩先生に心から感謝申し上げますとともに、謹んで先生のご冥福をお祈りさせていただきます。

最後に、先生のこれまでの多大なるご功績により、平成21年11月17日、正五位瑞室中綬賞を授与されましたことを併せてご報告させていただきます。

(平成22年1月4日受付)